



第43期生 卒業式 その2

■答辞

寒さの中にふと春の訪れを感じる三月。今日僕たちは卒業の日を迎えました。

僕は四十三期生のことが大好きです。

でも、最初からそうだったわけではありません。僕はこの中学校三年間でたくさん悩みました。中学校に入学してみると、私が思っていた中学生活とは全然違って、小学校の頃に帰りたと思っていた。小学校が違う人たちと集団生活を共にする中で、クラスの子の気持ちが分からなかったり、意見が食い違うことがありました。クラスもうるさくて授業が止まってしまう事もありました。

そんな中、自分が辛かったのは小学校が同じだった身近な友達が悪い方へ変わっていったことです。今思うとその友達も何か悩み事があったのだと思いますが、その頃の僕は、「この子は悪いことをするような子じゃない」、「もっと良いところがたくさんある」と思っていました。その子だけでなくクラスのみんなも、もっと良いところがあるのに、このままだったら良いところが目立たなくなってしまうと思っていました。

だから僕はクラス代表になりました。クラスを良くしたいというやる気がなぜか僕の中にありました。しかし、やってみて思ったことは、「難しい」でした。積極的に行動しても、みんなのやる気が無かったり、どうでもいいと思っているクラスメイトがいたり、今のクラスが良い雰囲気ではないことに気付いているのに、協力してくれない子もいました。それで自分一人で抱え込んでいきました。クラスを変えようと伝え続けても変わらないならもうダメだと思ってしまいました。クラスから逃げ出しそうになって距離を置いた時もありました。今思うと、もっと周りを頼れば良かったと思います。逃げるのは楽だったけれど、やり切りたいという気持ちがあり、両親の支えや、先生方の励ましで、諦めることなく、クラス代表を務めることができました。クラスのことがやっぱり気になり、友達のことでも放っておけなかったからです。

僕はこのような経験から、クラス代表をやって良かったと思っています。一人で抱え込みすぎず、みんなに頼ってもいいこと、友達に関わらないとわからないところがあるこ



と、そして友達と深く関わっていく楽しさや難しさを学び、友達の良いところもたくさん知ることができました。だから僕は四十三期生が大好きです。

クラス代表として最後の呼びかけをします。四十三期生は元気いっぱいの学年です。四十三期生は様々な取り組みや行事を通して、笑顔も増え、全員で修学旅行に行くことができ、学年全体が仲良くなることができました。ただ、問題が起こったとき、正直に出てきてくれる人がいなかったし、周りの人たちも知っていても話してくれず、誰か任せになっていた部分が残念でした。これからは一人ひとりが誰か任せにせず、自分の人生を進んで行ってください。

私はバレー部に入っていました。入部した時は「仮入部が楽しかったから」という軽い気持ちでした。でも、二年生になって試合で勝ちたいという気持ちに変わり、悩み事が増えていきました。実際、試合で勝つことはそんなに多くはなかったし、最後の試合も勝つことができずに終わりました。悔しかったけれど、仲間と毎日がんばった経験が無駄になったとは1ミリも思いませんでした。部活を通して私が学んだことは勝ちたいという思いを原動力にして、仲間と一緒に頑張った時間は、良い結果よりも重みのあるものだという事です。

私は中学校生活で行事がとても思い出に残っています。みんなが本気で取り組んでいたから、三年生の行事が一番達成感を味わえました。

体育大会で、私のクラスは一つになれました。私たちは団優勝をとることを目標として頑張りました。本番当日、競技を重ねるごとに「このままじゃ優勝できない」という焦りが私たちの団に出てきました。団長だけでなく三年生全員が一・二年生に声をかけて、みんなで喉がガラガラになるまで応援しました。団の中で声を出していない人は誰一人いませんでした。みんなが全力で汗を流して楽しみながらも競い合っている時間は、その場にいる人にしか感じられない、貴重な時間だったと今では思います。そして、ドキドキしながら「赤団優勝」と聞いたときの喜びは今でも覚えていて、これからも忘れたくない瞬間です。

合唱コンクールも心に残っている行事です。二年生の時は最優秀賞をとり、その喜びと達成感をもう一度味わいたいと思い、三年生でも文化委員になりました。正直、二年生の頃よりも騒がしいクラスで、なかなか自分の声が最初は届かなかったです。それでも頑張って「ここは小さく歌おう」など自分なりのアドバイスを言いました。この時、クラスのみんなは誰も文句を言わず、言ったことをしっかりやってくれました。私は、ちゃんと文化委員としてまとめられているということに安心したし、素直に嬉しくて良いクラスだと思いました。当日、どのクラスもまとまっていて、真剣に取り組んでいる

ように感じました。四十三期生全員で歌ったとき、みんなの歌声が体育館に響きわたって、この学年は全力で取り組んで、めいっぱい楽しむことができる最高の学年だと感じました。結局私たちのクラスは賞をもらえなくて悔しかったです。でも、残ったことは結果ではなく、みんなで歌って練習したという思い出です。どんなことでも、結果が良くても悪くても、全力で取り組めば楽しめることに私は気がつきました。一生懸命仲間と頑張ることのでられるものは人生において大きいものだと思います。私は自分が頑張ることによってそんな仲間と出会えました。

私たちはたくさん悩みながら成長してきました。その成長の陰には多くの人の支えがありました。

行事を一緒に心から楽しんでくれた先生方、四十三期生を支えてくれてとても楽しい学校生活を送ることができました。

三年間本当にありがとうございました。

何気ない日々にはふざけあった友達、いつもそばにいて、笑いあえた友達、卒業したくないと思わせてくれた友達、どんなに小さいことでも一緒に楽しめた友達、本当に出会えてよかった。

そして、生まれた時から今まで支えてくれた家族、進路を決めるとき背中を押してくれた家族、僕のことを一番に考えて優先してくれた家族、いつでも僕の無事を願ってくれた家族、15年間ありがとうございました。

これからも見守っていてください。

私たちはこれからも悩むことがきっと出てくるでしょう。そんな時、自分自身が頑張ることによって、一緒に頑張ってくれる人や助けてくれる人が周りに出てくると思います。そういう人たちとの関りを大切にしていけば、どんな悩み事も良い方向に変わっていくはずですよ。

だから、私たちは十五中での思い出や経験、そしてたくさんの人たちとの関りをこれからの人生につなげていきます。

四十三期生 卒業生代表

中尾 早紀

濱崎 光聖

卒業の歌の合唱

素晴らしい歌声が体育館に響き渡りました。

退場の時には涙、涙、また涙、

感動の卒業式でした。



タイムカプセル ～むらたけ会の皆さま、有難うございます～

卒業式の2日前、今年も河津桜の下の花壇にタイムカプセルを埋めました。むらたけ会（PTAのOB会）の皆さまが毎年お世話いただき、その年度ごとに5つの花壇のひとつにみんなが書いたり作ったりした記念のものを埋めているのです。

これは、卒業生の皆さんの20歳の成人式の前に掘り出し、当日それぞれの人に返されます。15歳の時に書いた将来の夢や決意を20歳になって見返すとまた新しい感慨があるでしょう。楽しみですね。

むらたけ会の皆さま、有難うございます。

